

Summer

全国大会 参加報告 ～ 2024 ～

・第48回 日本クラブユースサッカー選手権(U-18)大会

Report No.3

第 48 回 日本クラブユースサッカー選手権(U-18)大会

参加報告

2 級審判員(関西/兵庫)

木村翔太



木村審判員（前列右から 2 人目）

はじめに

はじめに、クラブユースチームの頂点を決める重要な大会に、審判員として 参加することができ、貴重な体験を多くすることができました。審判員として選んでいただいた(一社)関西サッカー協会審判委員会、並びに日頃お世話になっております(一社)兵庫県サッカー協会審判委員会の皆様、大会期間お世話になりました関西クラブユース連盟の皆様へ感謝致します。

大会と参加審判員

大会：第48回日本クラブユースサッカー選手権(U-18)大会

開催日時：2024年7月22日～31日

場所：群馬・大阪・山口・宮崎

参加者：各地域強化2級審判員
レフェリーアカデミー4期生



審判員大会テーマ

主審と副審との協力

— 最適なコミュニケーションについて —

事前研修会

■ 第1回事前研修会

- ・ 派遣についての説明
- ・ 大会要項についての確認
- ・ 競技規則改正説明

■ 第2回事前研修会

- ・ 主審と副審の協力
- ・ 最適なコミュニケーションについて



第2回の研修会はテクニカルな部分に関する内容でした。

前半パートの「主審と副審の協力」では、はじめにグループディスカッションを行い”主審が求める副審の援助”について考えました。

その際のキーワードとして、「審判団のチーム力を強固にして周囲に有効な影響を与えるためにはどう行動すれば良いか」ということが挙げられました。またその際に、**事実・真実・真相**をしっかりと分けて考え、**事実**をまずは正確に掴むことが必要だと学びました。

後半パートの「最適なコミュニケーション」では、まず基本の競技規則の文言で副審から主審へのコミュニケーションの取り方を確認しました。そこから”最適”にするために何が必要かということ映像を用いてディスカッションしました。やはりベースとなるのは”シンプル・ショート・クリア”でした。その上で、<焦点を絞って話すこと>や<異なった取り方・理解をされるような話し方をしない>といったことを学びました。



担当試合

◆2024年7月22日(月) : グループステージ Gグループ第1日

北海道コンサドーレ札幌 U-18 - V・ファーレン長崎 U-18

主審：竹本琉飛氏 副審：木村翔太・筒井雅俊氏 第4の審判員：中野卓氏
WS：山本弘之氏

大会1日目は副審を担当しました。ベンチを背負う副審として、主審のコントロールを援助できるように判定やベンチの対応を意識しました。この試合では2枚の警告で退場となる事象がありました。審判団で協力し、スムーズに試合を再開させることができたことは良かったと思います。

◆2024年7月23日(火) : グループステージ Gグループ第2日

北海道コンサドーレ札幌 U-18 - AC長野パルセイロ U-18

主審：木村翔太 副審：木下博史氏・山本和哉氏 第4の審判員：中川琢士氏
WS：安元利充氏

自分自身の売りである、走力とポジショニングを活かしたレフェリングを行うことができました。インストラクターの安元氏からは主審としてのたたずまいや、走り、チャレンジするレフェリングを評価して頂きました。課題点としては、判定とコントロールの部分が挙げられました。判定では、「アドバンテージと警告のシーンの状況判断をもっと細かく時系列で事実を把握することが必要」とご指摘頂きました。コントロールでは、ゲームに入りすぎて笛の表現がマッチしていない部分があるのではないかとご指摘頂きました。

◆2024年7月26日(金) : グループステージ Hグループ第3日

モンテディオ山形ユース - ヴァンフォーレ甲府 U-18

主審：木村翔太 副審：大内隆氏・金森一真氏 第4の審判員：嶋田京介氏
WS：山本弘之氏

グループリーグ最終戦ということもあり、両チーム気合いが入っている様子が試合前から見られました。試合自体も後半アディショナルタイムに2点が入る激しい試合となりました。私自身は、前の試合に出た課題を意識しつつ売りを存分に活かすレフェリングができました。

インストラクターの山本氏からは、前半早々の異議のシーンをどう捉えるかというお話がまずありました。「なぜ異議が起きたのか」「どうすれば良かったのか」ということを改めて考える機会となりました。また、「走りにどれだけ付加価値をつけることができるか」というお話も頂きました。走れることは当たり前で、その中に戦術理解や予期予測をより高めていくことが必要だと学びました。また「必死に走っている」といった印象だけでなく、見せ方の面で「余裕をどれだけ見せられるか」もこれから必要ではないか、と数多くの指摘・指導を受けました。



大会期間研修会

★全体振り返り

試合の翌日に各試合から1シーンを切り抜き、課題に対してディスカッションを行いました。自分自身の考えに加えて、審判員・インストラクターの皆様からアドバイスや意見を頂き、引き出しを増やすと共に整理することが出来ました。

★主審と副審の協力：安元氏

はじめに、コーナーキックやフリーキックの静止画から、主審として何を見ることができるのか・何が見られないのかということを考えました。その上で、〈副審としてどんなことをカバーしていけば良いのか〉や〈どんな援助がこれから必要になってくるか〉を考えました。

その後の映像ディスカッションでは、実際の映像から副審として最適な援助は何かを考えました。その際のキーワードとして「主審より明確に」ということが挙がりました。主審がどこにいて、どんな事実が起こったのか、これらを明確に把握しておかなければ最適な援助はできない、と学ぶことが出来ました。

★コミュニケーションについて：松尾氏

普段我々が行っている会話の一部分でもある【選手との会話】について考えました。時として「合っているけど、合っていない?」ような矛盾しているものもあり、一見会話の受け答えとしては成立しているように見えていても、選手が欲している内容や意見に対し、我々が適切な回答を伝え切れていないことや、話がかみ合っていないことがある、と気付くことができました。このような「ゲーム」と呼ばれる状況において、相手が何を求めているのか、何を渡せば良いのか、ということをもっと考えて行かなければいけないと学びました。また、マネジメントをして終わりではなく、その後関わった選手がどうなったのか、ということが大切だと学びました。

★映像ディスカッション：山本氏

GKとFWが接触したシーンについてディスカッションを行いました。映像からは主審の判定が誤っているように見えました。その際に副審として、こういったサポートができるのかということディスカッションしました。

まずは、副審として事実を正確に把握すること、そこから選手に言われる前に主審に情報を伝えるということを確認しました。またその際に、主審としても副審からのサポートをもらえるようなポジショニングを考えることも必要ではないかという意見も出ました。

——大会を振り返って——

— 昨年は副審として、昨年・今年主審として、3大会連続でこの大会に参加させて頂くことが出来ました。これまで自分自身の特徴点でもある走力とポジショニングに関して、全国の舞台でも発揮することが出来たことはとても大きな自信になり、昨年の自分のレフェリングと見比べても大きな成長を感じる事が出来ました。

その一方で、新たな課題も発見することが出来ました。また、他地域の審判員の審判員と交流していく中で、新たな視点やヒントを沢山得ることができました。この学びをもう一度自分自身で整理していくと共に、フィールドで表現できるような取り組みをしていきます。

そして、微力ではありますが一つでも多く関西・兵庫のサッカーに還元できるよう、頑張り続けます。

この度はこのような大会に派遣する機会を与えて頂いた、(一社)関西サッカー協会、そして私を成長させていただき日頃お世話になっております(一社)兵庫県サッカー協会、大会期間中サポート頂いた関西クラブユース連盟の皆様へ感謝いたします。ありがとうございました。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

